

桑名市というところ

桑名市は三重県の北端にあって、豊かな緑の鈴鹿連峰と養老山系を背後に、揖斐・長良・木曾の三大河川が伊勢湾に注ぐ堆積デルタ地帯に位置しています。

このような立地条件を有する桑名は、古くから海上交通輸送の拠点として発達し、「十楽の津」と呼ばれ、米、木材、油などが集散する活発な商業都市を形成してきました。

江戸時代に入ると、東海道五十三次の「七里の渡し」の宿駅機能が付加され、宿場町として、また松平十一万石の城下町として栄えました。

明治22年桑名町となり、大正12年に赤須賀村、昭和8年に益生村、同12年には西桑名町と合併し同年4月市制を施行しました。昭和20年7月戦災を被り、市街の大半は焦土と化しましたが、その後、市民のたゆまぬ努力をもって復興し、昭和26年に桑部、在良、七和の3カ村と合併、同30年には久米、深谷村と、翌31年には城南村と合併して面積は57.39k㎡となりました。

昭和34年9月26日、未曾有の被害をもたらした伊勢湾台風の来襲では、市街地のほとんどが水中に没して一時は陸の孤島と化し、その被害は死者201名、負傷者1,531名、罹災者38,000名、被害総額200億円に達する、空前の災害となりました。その後、護岸堤防の改修工事、排水工事の整備促進により水に強い都市へと変革しています。

そして平成16年12月6日、桑名市、多度町、長島町が合併し、面積136.65k㎡の面積を有する新「桑名市」として、新たなスタートを切りました。

歴史のまち桑名の伝統や文化面では、天下の奇祭で有名な国指定重要無形民俗文化財「桑名石取祭」同「伊勢大神楽」をはじめ、桑名の千羽鶴など有形・無形の貴重な歴史的伝統財産が伝承されています。このほか、東海道の「七里の渡し」や街道筋、沿道に建立された青銅の鳥居、桑名城のなごりをとどめる城壁、堀などの史跡も数多く残されています。大正2年に完成した「六華苑」は鹿鳴館の設計で有名なイギリス人建築家ジョサイア・コンドルによる貴重な建築物として、国の重要文化財に指定されています。

桑名市北部に位置する多度地区は「多度峡」など緑ゆたかな自然や、上げ馬神事や流鏝馬祭りで有名な「多度大社」といった名所を有し、木曾三川に囲まれる長島地区は「輪中」にその護岸の歴史をとどめ、また全国に名を知られるレジャー施設は、連日活気に満ちた賑わいを見せています。

産業面では、鋳物は特に「桑名の鋳物」として三百数十年の歴史を誇り、古くから全国有数の鋳物産地として知られていますが、近年は、工業団地が造成され大規模な企業進出も進んでいます。他にも、海水と木曾三川の河川水が適度に混合する豊かな海域における水産業が盛んで、蛤、シジミ、海苔、白魚の産地としても有名です。

また平野部では稲作を中心に花卉園芸やトマト、なばな、丘陵地ではみかんなどの生産が盛んで、他にも山あいを流れる清らかな谷川で育った川魚を使った料理など、山、川、海の自然の恵みに支えられ、彩りゆたかに桑名の食文化は発展してきました。

交通面では、J R 関西本線や近鉄名古屋線、養老鉄道、三岐鉄道北勢線などの鉄道や、国道 1 号・23 号・258 号・421 号線と東名阪自動車道、伊勢湾岸自動車道が貫通し、名古屋、大阪をはじめとする、都市間を結ぶ大動脈として放射状に整備され、広域化する人と物との交流を積極的に支援する、交通の結接点としての条件を備えています。

近年の桑名は幹線道路網の整備、大規模な住宅地開発、下水道事業の促進等、都市基盤の整備が着実に進められています。新名神高速道路、東海環状自動車道等、主要幹線道路へのアクセスが容易となる地域性から、今後、文化や情報の交流・発信地としての整備も推進され、『本物力こそ、桑名力。』をキャッチフレーズに掲げ、『次世代へと続く快適な暮らしの中でゆるぎない魅力が本物として成長し続けるまち桑名』を本市のめざすべき都市像として、その実現に向けて、着実な一歩を踏み出しています。